



後継者

MIRANDA MOYER 著

ストーリー

MIRANDA MOYER

イラスト

SUHEB ZAKO, NESSKAIN

編集

SHANNON WATTERS

デザイン&アートディレクション

SOPHIE ERB

クリエイティブ・コンサルタント

JEFF CHAMBERLAIN, CHLOE FRABONI, MIRANDA MOYER,
NESSKAIN, DION ROGERS, JUDE STACEY

プロダクション

BRIANNE MESSINA, CARLOS GARCIA RENTA,
TAKAYUKI SHIMBO, JT TORREA

翻訳

SACHI MORITO



Blizzard.com

© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国における Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

このストーリーはフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のものです。実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。

Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。

後継者

彼が地に伏した日のことは今でも覚えている。

崩壊した街の一画、辺りには無残な結末を迎えた平和維持軍の志願者たち。“調和の都市”ヌンバー二……馬鹿げている。行政の説く団結など慰めの幻想に過ぎない。あのような出鱈目が市民を軟弱にさせたのだ。

ヌンバー二は確かに変革を必要としていた。だが、果たしてこれがその“変革”と言えるのだろうか？ 何の意義もなく、いたずらに奪われた街並みと命。

そのすべてから益するのは、ただ一人。

「これで全員だ。前衛部隊に伝えろ……金庫室の中身を丸ごと運び出せと」

我が師、アキンジデ・アディエミ——彼が喘鳴混じりに出す命令もとうに聞き慣れたものだ。ヌンバー二は彼を災禍と呼んだが、私に言わせればあまりに大仰だ。年月とともに目先の些末な報酬ばかりに囚われるようになった彼は、もはやタロン頭首として不適格なまでに堕ちていた。

だが、「ドゥームフィスト」の主にあえて刃向かおうとする者など存在しなかった。

ドゥームフィストは、アディエミのすべての弱みを補って余りあるほどの絶大な威力を誇るガントレットだ。彼自身がいくら衰えたと言っても、その頑強な装甲に覆われた拳を食らえば常人はひとたまりもない。

——だが、私は違う。弟子としてアディエミの動きも弱みも熟知したうえで、すべてにおいて彼を代替できる能力をすでに備えている。あとはその最強の武器が冠する称号を奪うのみだ。



「終わりだ、アディエミ」

「何の話をしている？」

「これほど簡単に不意を突かれるとは、随分と臍抜けたものだ」

「俺の勝利がもたらす恩恵にあずかりながら、楯突くつもりか？」

「勝利？ 周りをよく見るといい。貴様が起こした行動はすべて……無意味だ。タロンは私欲を満たす道具ではない」

「ふざけた真似を。今のタロンがあるのは誰の功績だと思っている？」

「ヌンパーニで小悪党が如く略奪を繰り返す今のタロンが、一体何だと言うのだ？ 貴様はこれまで何のために戦ってきた？ 一度手にした力が永遠に続くなどと思うな」

「青二才が、俺にこの力を扱い切れないとでも言うつもりか？ 戦いに負けたことなど、これまで一度たりともない」

「その無敗記録は正真正銘、己の力で打ち立てたものか？ ングミから借りた力に頼っているに過ぎないだろう」

アダブ・ングミは自らの手で作り上げたドゥームフィストを振るい、オムニック・クライシスによる甚大な被害を食い止めた。アディエミの最大の偉業は、せいぜい英雄の亡骸からその力を盗み取ったことくらいだろう。

「貴様が頭首の座に居座る限り、タロンに未来はない。新たな時代に適応しろ——さもなくば、死ね」

「思い上がりも甚だしい奴だ。お前を鍛え上げたのは、他でもないこの俺だ。俺なくして、お前一人に何ができる？」

「貴様がいなければ、この私を阻むものなどない」

その言葉を聞くと、アディエミは乾いた笑みを浮かべた。尊大な態度が影を潜める。これが最後の戦いとなることを確信しているのだろう。

「お前に、俺の築き上げた財の後継者たる器があるか……試してやろう」

渴望していたこの瞬間。とうに覚悟はできていた。

——だが、何かがおかしい。

全身が重く、思ったように動かすことができない。眼前の我が師の姿は次第にぼやけ、歪んでいく。

「言っただろう。力は受け継ぐものではない……」

そう告げた声の主は、アディエミではなかった。

「己の手で勝ち取るものだ」

戦いは終わった。だが、目覚めるとすぐに別の戦いが始まった。





動かなければ。呼吸をしなれば。生きねば。

どれほど深くまで落ちたのだろう。猛烈な痛みと痺れ。開いた傷口に追い討ちをかけるように、頭上の嵐から雲が吹きつける。

地面からどうにか立ち上がろうと手をつく、馴染み深い幻肢痛が襲う。だが、右腕にあるはずの硬く冷たい感触はそこにはなかった。

ガントレットを失った。

——私は、敗北したのだ。

かつてアディエミから頭首の座を奪った私は、自分が彼と同じ過ちを繰り返すはずもないと思っていた。だが、それこそが驕りだったのだろう。頭首失格の烙印を押され、己の失策で身を滅ぼす。私はまさに彼と同じ道を辿ったのだ。

残された選択肢は二つに一つ。適応か、死か。

——否。

彼のように行き過ぎた野心に溺れたまま、結末まで同じくするつもりは毛頭ない。どちらを選ぶかは、とうに決まっている。

